

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター

カトリック仙台司教区・カリタスベース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座:00170-5-95979
名義:カリタスジャパン

新しい年の初めにあたり、皆様への感謝と皆様の上に神様の豊かな祝福をお祈りいたしております。今年もどうぞよろしくお願い申し上げます。昨年は、熊本地震や台風10号の影響による集中豪雨水害をはじめとして、被害の大小に関わらず全国各地で様々な自然災害が発生しました。東日本大震災から丸6年が経とうとしている今、この東日本大震災復興支援活動において、蓄積された経験が無駄にしないよう、これまでのことを振り返りながら、今後の糧として今年も引き続き活動を進めてまいりたいと思います。

さて、今回は、次の3つの記事をご紹介します。はじめに、CTVC カリタス原町ベースは、新ベース完成とともに「カリタス南相馬」と名称も新たに活動を行うことになりました。12月17日落成式が行われ、「カリタス南相馬」としてのスタートを切った様子をご紹介します。次に、仙台教区内の仙塩地区8教会は、情報交換会を月1回開催し、チームを作って息の長い復興支援活動にしていくための準備を進めていますので、その様子を簡単にご紹介します。最後に、被災地を忘れないでいてもらう取り組みとして、第16回アジアカトリック医師会総会にて被災地からの写真展示を実施してくださった日本カトリック看護協会仙台支部長 古関睦さんから報告が届きましたので、ご紹介します。

「カリタス南相馬」落成式

仙台教区サポートセンター 長谷川 昌子

2016年12月17日(土)、福島県南相馬市で「カリタス南相馬」の新築工事・落成式が行われました。

これまで、カトリック東京ボランティアセンター(CTVC)はカトリック原町教会の信者さんの家をお借りして、「原町ベース」の支援活動を行っていましたが、末永く現地のニーズに応じて活動を継続するために、このたび、カトリック原町教会の敷地内に、ベースを新築し、名称も「カリタス南相馬」と改め、「新築落成式」が行われました。

その日は朝から寒風が吹き、大勢の招待客と参加者で、会場はいっぱい。外のウッドデッキに並べられたイスもすぐ満席となり、立ったまま参加した人も出たほどでした。



駐車場にまではみ出すほど、多くの方に見守られて落成式が行われました

式は、午後1時半から始められました。聖歌「ごらんよ空の鳥」を歌い、「すべてのものに染みとおる 天の父のいつくしみ」をたたえることから始まりました。続いて「……この建築工事を完成に導いてくださったことを感謝します。……これからここで働く人々と、ここを利用する人々が、あなたのいつくしみに支えられ、守られますように」との祈りの後、使徒パウロの「ローマの教会への手紙」と「マタイによる福音」の聖書が読まれ、平賀徹夫司教が「5年9か月前、東日本大震災と福島第1原発事故により、2万人以上の死者が出、家を失い、財産を失い、ここ東北地方に住む人々は、苦難の日々を送ってきました。カリタス南相馬は、CTVCの力添え、特にカリタスジャパン、カリタスアメリカの支援があって、ここまで歩んできました。……支援だけではなく、ここで働く人々も、ここまで導いてくださった神の力を信じ、これからも、私たちを力づけ、導いてくださいと祈りながら支え合い、一緒に生きていこうとしています」と話しました。



カリタスアメリカのグレッグさんも落成式に参列されました(写真左中央)
「カリタス南相馬」所長として挨拶された畠中千秋所長(写真右)

「共同祈願」「祝福の祈り」が心を込めて唱えられた後、「愛といつくしみがあるところ、神はそこにおられる」と歌われるなか、まず、会場となった場所(多目的ホール)が、平賀司教の手によって聖水で祝福され、台所、事務室、2階のスタッフ、ボランティアの宿泊場所、納戸、お風呂場、洗面所、玄関などが荘厳に、次々に祝福されていきました。



平賀司教による祝福の様子(写真左及び中央)
南相馬市長・桜井勝延氏からのご挨拶をいただきました(写真右)

その後、来賓の挨拶。まず、南相馬市長・桜井勝延氏が、「南相馬市の受けた津波と原発の被害で、世界で経験できないことを、私たちは経験してきました。南相馬市の復興計画が、注目されています。このベースを復興の基地として、お力添えをいただきたいと希望しています。南相馬市を世界に誇りたい」と期待を込めて話されました。南相馬社協の災害復旧復興ボランティアセンター長・鈴木敦子さんは、「カリタス南相馬は、今まで瓦礫撤去、庭木の伐採、その他の多くの働きで、力を貸してくださっています。何よりも地元住民の皆さんに、本当に愛されている存在です」と、ベースのスタッフとボランティアの働きを高く評価してくださいました。その他、設計、施行各社社長、CTVC 責任者・幸田和生司教、カリタス南相馬所長の Sr.畠中千秋から、それぞれ、喜びと希望を込めた挨拶の言葉が続きました。

長年、ベースとして家屋を貸してくださっていた曳地弘子さんと、建築設計に当たられた株式会社高垣建築総合計画の代表取締役・高垣健次郎氏と建築施行に当たられた新発田建設株式会社・渡辺明紀氏に感謝状が贈られました。

閉会後は同じ会場で茶話会があり、温かい雰囲気になった「カリタス南相馬」の落成式が終わりました。参加者は、招待客だけではなく、ボランティア活動を通してカリタス南相馬ファンになった人々、司祭、シスター、信者の教会関係者、仏教関係者など、「カリタス南相馬」の復興支援活動にかかわり、今後の活躍に期待を寄せている多くの方々の存在が、頼もしく思えました。

木造2階建て71坪の「カリタス南相馬」



エピソード

1. 7月から工事が始まりましたが、工事期間中の幼稚園児、ご父兄の方々の安全に最大の注意を払いました。(建築関係者)



カリタス南相馬の隣には、カトリック原町教会と原町さゆり幼稚園があります
2階ボランティア宿泊室の窓からは、幼稚園の園庭や園舎も見えます

2. 工事期間中、2回、台風に見舞われましたが、屋根ができてから雨が降ったのは幸いでした。(ベーススタッフ)

3. 東京の真生会館の建築も設計、施行を同じコンビで行っていたので、しばしば、真生会館の会議がそのまま、カリタス南相馬の建築会議の席上になりました。壁も床も真生会館と同じ材質、同じ色となりました。(設計、建築関係者)

4. 7月に建築が始まり、クリスマスまでに完成するようにとのことでしたから、鉄筋、鉄骨の建物は、工期の条件では無理でした。鉄筋にしる、鉄骨にしる、寸法を指定して発注しても、最低2か月はかかります。それでは、とてもクリスマスまでには完成しません。それで、木造ということに決まりました。(建築関係者)

5. 少なくとも、10年は持つ建物を、ということも言われていました。それで、木造でも、100年はもつ立派な建物にしようと話し合いました。そのように出来たと自負しております。(建築関係者)



玄関に並べられたスリッパにも「カリタス南相馬」の印がありました
下駄箱の上には、お祝いやお礼のメッセージやイラストが飾られていました

6. 東日本大震災が起きたとき、すぐにでも手伝いにいきたいと思っていました。わたしたちの設計建築仲間の中には、現地に赴き、ボランティアで自分の能力を発揮した人もいました。しかし、その頃、私は、大きなプロジェクトを抱えており、その場をはずすことはできませんでした。このお話が来たときは、本当にうれしかったです。この時が来たんだ、私に与えられた時だと感じました。その意味でも一生懸命にやらせていただきました。(設計関係者)

7. 今回のプロジェクトは、私(高垣建築総合計画)がかかわった、いちばん最小のプロジェクトです。

8. あるボランティアさんの言葉——ちょうど、建物の柱が立てられた時に見ていました。筋交いが新しく入れられていました。その様子をみて、これは地震対策も万全に施されていると分かりました。



多くのボランティアさんが少しでも活動しやすいように、複数の洗面台や大きな台所が設置されています

仙塩地区教会被災地支援活動情報交換会

カトリック元寺小路教会(サポートセンター相談役) 園部 英俊

仙台地区では東日本大震災で被災された方々の復興公営住宅への転居が進み、各教会による仮設住宅集会所での「お茶会」などの支援活動は八木山教会を除いて終了しました。それぞれの教会が今後の取り組みを模索していた2015年4月、元サポートセンターの事務局員であった私が呼びかけをさせていただき、仙台市内と塩釜(仙塩地区)の8教会の支援活動関係者による情報交換会をもちました。

元寺小路、北仙台、八木山各教会は単独で支援活動を行ってきましたが、東仙台教会と塩釜教会は塩釜市内での仮設住宅、西仙台、一本杉、畳屋丁教会は仙台市荒浜の仮設住宅において小教区協働による支援活動を行って来ました。



(上) さっそくオープンスペースの利用者とお話をしていました
(左) カリタス石巻ベースを訪れた仙塩地区の方々

震災から時間が経過するにつれ、被災された方々の状況が変化していくと同様に支援活動を行う側にも変化が生じてきます。仮設住宅の閉鎖に合わせて訪問活動を終了せざるをえないが、はたしてそれでいいのだろうかという迷いや不安、あるいは高齢信徒から活動の長期化による疲れの声が聞かれるなどマンパワー確保の困難さも見え始めていました。そこで日頃、降誕祭、復活節の合同典礼や合同墓地清掃などで顔を合わせている仲間どうしですから、支援活動についても皆で集まって思いや悩みを共有しようということになりました。

2016年7月末、平賀司教様は「東日本大震災復興支援新しい創造基本計画第4期計画」を発表なさいました。この中で司教様は「地元仙台教区の小教区が互いに協力し合って長期にわたって持続的な活動を」と強く呼びかけています。これを受けて、10月の第4回例会では、今後、私たちにできることは何か? 近隣教会が手をつないで共にやっていくにはどうすればよいか? などについて意見交換を行いました。その結果、これからは仙塩地区8教会でチームを作って支援活動に取り組んでいくことで皆さんが一致しました。

次に具体的な活動についてです。復興公営住宅には、仮設住宅訪問で信頼関係が築けた方々だけでなく様々な地区からの人々が入居しているため、「お茶会」などの受け入れは難しい状況です。新しいコミュニティ形成へのお手伝いが出来たらいいのですが、情報を集めながら慎重に検討していくこととしました。次に、今後も長期的な活動展開が想定される「カリタス石巻ベース」は仙塩地区からすぐ近くであり、石巻ベースを積極的に支援しようということになりました。さらに、これまで東京教区を中心とする支援活動にお任せしてきた感のある原町ベースや、福島県内の教会による支援活動とつながりを持とうということで皆の意見が一致しました。

さっそく、11月26日にはメンバー8人で石巻ベースを訪問し、ベース長の中村 愛さんから現在の活動状況やベースの運営状況などを詳しく伺うことができました。この日、仙台に戻って開かれた第5回のミーティングでは、この情報交換会にわかりやすい名称をつけて、仙塩地区の皆さんにも呼びかけをして息の長い活動をしていくことにしました。

第16回 アジアカトリック医師会総会にて 被災地からの写真展示をして

日本カトリック看護協会（JCN A）
仙台支部長 古関 睦

アジアカトリック医師会（AFCMA）の総会が2016年11月10日から13日まで京都の大学医学部構内、芝蘭会館で開催されました。アジア15カ国に欧米、中東、アフリカの国等の代表を加え308名の参加があった中で、被災地の写真展示を、仙台教区サポートセンター、CTVC カリタス原町ベース（2016年12月よりカリタス南相馬と改称）、カリタス釜石、カリタス熊本支援センターの協力で無事終えることができました。

東日本大震災から5年（11月11日で5年8カ月）の節目を迎え、元カトリック看護協会名古屋支部長で原町ベースのスタッフとして働いている南原摩利さんと「この総会でアジアの方々、日本全国の皆さまにぜひとも被災地の現状、忘れないでとのメッセージを伝えたい。そして今までボランティアや支援、お祈りをしてくださった皆様に、お礼と、まだ福島はまだ終わっていないこと、これからも援助が必要ということ伝えたい」と、この写真展をすることにいたしました。

参加者の多くの皆さまから温かい励ましのお言葉と募金を戴きました。本当にありがとうございます。またこのブースの許可をくださった日本カトリック医師会（JCN A）の人見滋樹会長、実行委員長の石島武一先生、実行委員の皆さま。そしていつも私たちが心から支えてくださっているJCN Aの各支部の皆さまに感謝です。各支部からの支援金をこの企画に使わせていただきました。

この大会のために、300個のアクリルタワシを宮城県東松島市の仮設の方々が、同じく300個の和服布のストラップを福島県南相馬市原町区の「真心サロン」の方々が丹精込めて作製してくださいました。ありがとうございます。皆さまの思い、感謝の気持ちはアジア各国の方々にも伝わったと思います。毛糸やご自分の大切な和服を送ってくださった皆さまにも感謝です。



写真展示に協力をしてくださった方々（中央が古関さん）

また、快く写真パネルを貸してくださった東松島市図書館の方々、資料提供してくださった宮城県の震災災害復興課の方、アクリルタワシ作製に協力してくださっている埼玉県富士見市の「えがお富士見」の方、ありがとうございました。

震災の時も震災の年に仙台で開催したJCN Aの大会でもそうでしたが、この写真展示をするにあたり本当に色々な人に出会い、助けられ、絆を感じました。感謝の日々でした。人と人との交わりの中に神様がおり、神様に導かれてこの企画に至ったように思います。

「よりそい つなぐ いのち」

「震災で失った『大切なもの』『愛しいもの』をかき集めた5年間」

「『受け入れる』姿勢『つながり』を大切に」（カリタス釜石5年史より）

「よりそいながら明日へ」（仙台教区サポートセンター3年史より）

「あの日を忘れず 共に未来へ 東松島一心」（東松島市の復興スローガン）

「ともに前へ！」（仙台市の復興スローガン）

今年の春に仮設から災害公営住宅に移られた70歳代後半の女性から電話がきました。「どうしている？ 元気？ 別に用事があるわけでないけど、声聴きたくて。始めは自分の家を持てて嬉しかったのだけど、一人だと前の家のこと、娘を育てたこと思い出す。誰もいないんだもの。一人だ！ とうちゃん家に一緒にいない。（夫と娘を津波で亡くしている。）一日誰とも話さない。隣の部屋に誰が入っているかもわからん。ずーっと一生ここに住むんだっちゃんね。仮設の時は良かった。集会所に行けば誰か知った人がいたもの。お茶っこ飲んだり、いろんな人がいろんなことをしに来てくれた。楽しかった。」ぽつりぽつり話す。彼女の淋しさがひしひし伝わる。結局1時間電話口で話を聞いた。これが今、そしてこれからの被災者の置かれている状況でしょう。そして福島はもっと複雑で多くの問題を抱えています。

被災者にとってこれからが大切です。人は一人では生きていけません。地域、自治体のコミュニティづくりの支援、そして心のケアが必要です。

今後ともこの現実を受け入れ、被災者、いや被災者だけでなく自分の身近にいる一人一人に寄り添い、耳を傾け聴き、祈り、見守り、「あなたは神様から与えられた大切な人、大切な命」と神様の愛（カリタスの心）を伝えていきたいと思います。

カリタスさま5年間本当にありがとうございました。これからも被災者にとって、「隣のカリタスさん」でいてほしいと願います。私たちもカリタスがある限り、被災者がいる限り、ボランティアに行きます。皆さまもこれからよろしく願いいたします。

Ubi Caritas et amor,
いつくしみと 愛のあるところ

Deus ibi est.
神はそこにおられる。



参加者の方は、福島について特に詳しくお話を聞いていました。写真の他、除染廃棄物が入られるフレコンバック（黒いトン袋）を展示し、実際にその大きさを知っていただきました



熊本地震支援金、東日本大震災に対する募金の受付は、現在も、引き続き行っております。

今後とも、多くの皆さまのご支援・ご協力をいただけますよう、何卒よろしくお願いいたします。

ニュースレターのメール配信をご希望の方は、お名前などをご記入の上、sdscckohoo@gmail.comまでメールをお送りください。次号よりお送りさせていただきます。多くの方に活動状況や被災地の現状を広めていただければ幸いです。